

高単価な茶の輸出拡大と輸入原料の増加

—2025年の緑茶貿易—

研究員 山本裕二

日本の2025年の緑茶貿易は高単価な茶の輸出が拡大した。特に小売販売やカフェでの使用に適した抹茶などの輸出が伸びた。一方、輸入は25年に急増した。飲料や食品の原料向け需要に対応しているとみられ輸入緑茶は当面、定着しそうだ。

1 拡大する輸出入単価の格差

2025年の緑茶輸出は拡大の勢いが強まった。輸出金額は約721億円と前年比で2倍に急増し数量は1万トンを超えた(第1図)。

一方、輸入は例年の水準から大きく増加した。金額は約50億円、数量は約4,610トンとこ

こ数年の3,000トン台に比べ水準が大きく上昇した(第2図)。

また、輸出と輸入の単価の差は年々拡大している。25年の輸出単価は1kgあたり5,716円と右肩上がり推移している。一方、輸入単価は1,085円と上昇の勢いは輸出単価に比べ緩やかとなっている(第3図)。この結果、25年は両者の価格差が大きくなった。この背景には輸出する緑茶と輸入する緑茶で品質や用途の違いがあるとみられる。

2 高単価な緑茶が輸出拡大を主導

輸出状況を詳しくみると高単価な緑茶が拡大を主導していることが分かる。貿易統計上、輸出する緑茶は「3kg以下の粉末状」「3kg以下のその他」「3kg超えの粉末状」「3kg超えのその他」の4つに分けられる。「粉末状」には抹茶が含まれ、「その他」は急須で淹れて飲むリーフ茶を指す。また、3kg以下は小売店で販売される個包装のものやカフェで使用されるものが多いとみられる。一方、3kg超えは飲料や食品の原料・加工用としての用途が多い。

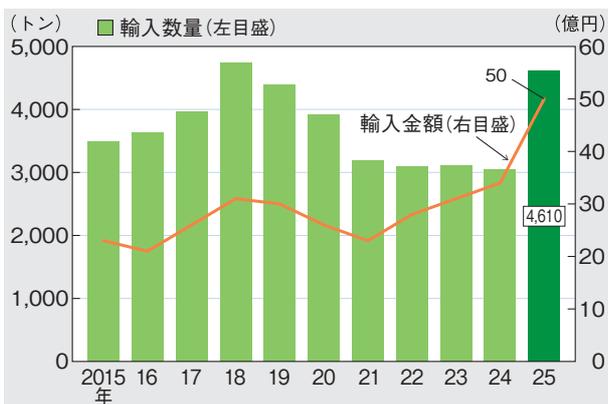
この4つの緑茶について横軸に輸出数量の過去5年平均成長率、縦軸に輸出単価、円の

第1図 緑茶輸出実績の推移



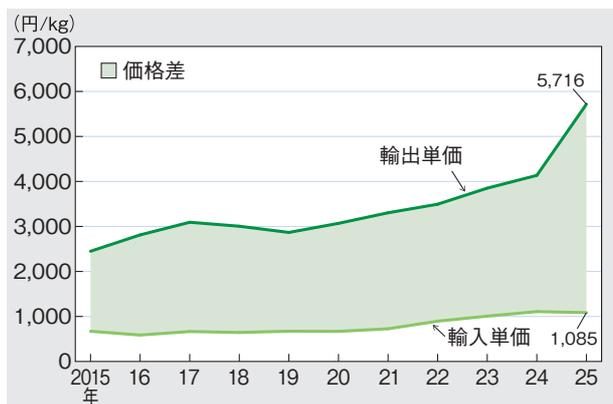
資料 財務省「貿易統計」から農中総研作成

第2図 緑茶輸入実績の推移



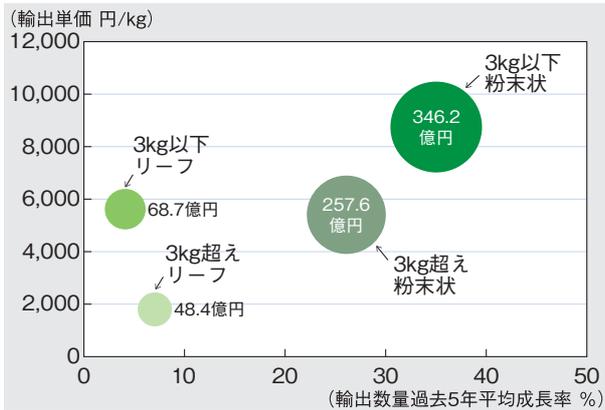
資料 財務省「貿易統計」から農中総研作成

第3図 輸出入単価の推移



資料 財務省「貿易統計」から農中総研作成

第4図 形状・重量別緑茶輸出の成長推移



資料 財務省「貿易統計」から農中総研作成
 (注) 円の大きさは25年の輸出金額を示す

大きさを輸出金額としたのが第4図となる。右上に行くほど高単価かつ高い成長を維持していることを示す。

図をみると「3kg以下の粉末状」が最も右上に位置しており、輸出金額も高い。つまり高価格帯である緑茶が日本の緑茶輸出全体をけん引していると言える。世界的に抹茶ラテなどを中心に抹茶の需要が拡大した影響で、粉末状緑茶の引き合いが強くなっていることを映している。

3 原料向け緑茶の輸入が急増

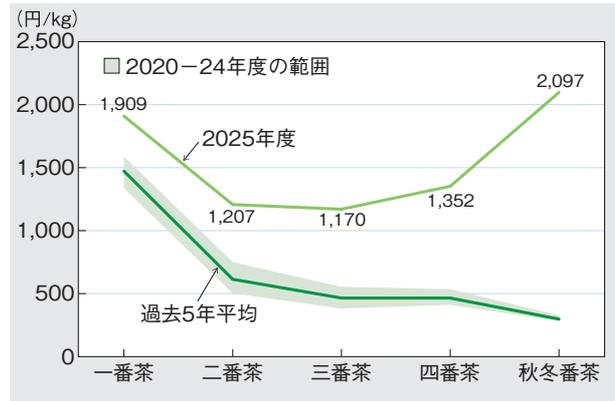
輸入については、原料用としての需要が増加しているとみられる。輸入緑茶は統計上、輸出とは異なり粉末状やリーフといった区別はないが、「3kg以下の緑茶」「3kg超えの緑茶」に分けられる(注1)。このうち、原料や加工用としての用途が多い「3kg超えの緑茶」の輸入数量が伸びており、輸入金額も全体の約9割を占めている。

この「3kg超え緑茶」の輸入先をみると金額と数量ともに中国が9割近くを占めており、日本の緑茶輸入は中国に大きく依存していることが分かる。特に24年から25年の単年に限っては5割急増した。

「3kg超え」輸入の急拡大の背景には食品や飲料原料向けの比較的安価な緑茶の供給不

(注1) その他にも「3kg超えのくず(飲用に適するものを除く)」があるが、輸入実績は少ない。

第5図 静岡茶市場での相場推移



資料 静岡茶市場「取扱実績累計表」から農中総研作成
 (注) 県内茶・県外茶合計の数値

足があるとみられる。これまで農家の高齢化や需要縮小による茶価の低迷で離農が進み生産量は減少する一方、輸出量は増加し緑茶ドリンクの原料使用量は横ばい圏で推移していた。その結果、国内の供給は需要に応えられない状況となっていた。

さらに抹茶の需要拡大に伴う抹茶原料である碾茶への転換によって煎茶の需給がひっ迫した。この動きが波及し、25年は特にペットボトル茶に使われることが多く収穫時期が遅い秋冬番茶の価格が全国的に急騰した。

実際、静岡茶市場における25年度の秋冬番茶の取引価格は1kgあたり2,097円と例年比で高騰した(第5図)。秋冬番茶の取引が落ち着いた12月単月に緑茶輸入が急増したことから、秋以降の高騰をみて輸入に動いた事業者が多かったとみられる。

4 茶葉高騰による輸入定着の可能性

このように、25年の緑茶貿易を振り返ると輸出は高付加価値化が進み輸入は原料向けが急拡大した点が特徴となる。

当面は輸入緑茶が定着すると考えられる。相場の上昇によって生産意欲が高まる可能性はあるものの、国内需要の動向を考慮すると大幅に生産量が増加する可能性は低い。全体の生産量が減るなかで、輸出向けに煎茶から碾茶への転換は進むとみられる。国内需要を輸入緑茶が補う構図が続くようだ。

(やまもと ゆうじ)